

認知症に「いけばな療法」

研究学会設立

医療・福祉専門家ら 効果など学術的に

生け花を認知症ケアなどに活用する「いけばな療法」を学術的に研究する「日本いけばな療法学会」の設立総会が10日、上京区の同志社大で開かれた。現時点では確立した療法に至っていないが、医療や福祉の専門家らが加わり、生け花の可能性を科学的に探る。

(秋山原)



生け花に関しては、花の色彩や香りが五感を刺激

し、花を組み合わせて個性を表現することが脳の活性化を促すのに役立つと考える意見がある。認知症患者が生け花を体験したところ、暴言や多動といった認知症の関連行動の抑制に効果が確認されたという報告があり、知的障害をもつ子供への応用を模索する専門家の動きも出ている。

今回、同志社大大学院で心理学を研究する華道家の浜崎英子さん(53)の呼び掛けに多数の賛同者が集まり、学会設立に至った。浜崎さんは2009年にNPO法人「フラワー・サイコロジイ協会」(右京区)を作り、これまで京都市内の

いけばな療法の可能性について語る学会の理事ら(上京区で)

福祉施設を数多く回り、独自のいけばな療法の実践に取り組んできた。

この日の総会でパネル討論が開かれ、学会の代表理事に就いた同志社大大学院の新川達郎教授は「いけばな療法が人々の健康や暮らしを豊かに変えるソーシャル・イノベーション(革新)につながっていく」と語った。また医者としての立場から神戸大医学部元教授の岡田昌義氏は「認知症の非薬物療法として期待できる」と述べた。

心理療法を巡っては、音楽や絵画による芸術療法、動物によるアニマル・セラピーなどが認知度を高めつつある。学会では、会員らでいけばな療法の臨床データを蓄積し、方法論や効果について医学や心理学などの観点から研究を進める。将来的には「いけばな療法士」の国家資格化も視野に入れる。

学会の副代表理事になった浜崎さんは「エビデンス(科学的根拠)の検証をしっかりしていけばな療法を心理療法として確立したい」と意気込んでいた。